

## ニッポナリアと対外交渉史料の魅力(21)

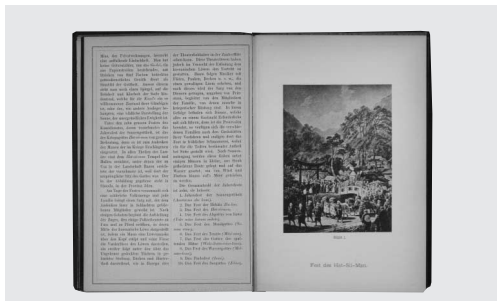
出版(写真)し、日本の対外交渉史研究の成果を発表しました。しかし、本書についても、「ほら吹き」とのあだ名まであり、来日経験も定かでないフェルナン・メンデス・ピントの『遍歴記』を参考資料に用いるなど、シーボルトばかりでなく、後世でも評価は芳しくありません。

## ■プロイセン使節団員として来日後、北軍将校に

この時期、ハイネはそれまでの著作が故国ドイツ圏の国々の東アジア遠征計画に貢献したことから、プロイセン政府から遠征隊への参加を求められました。これを受けたハイネは、フリードリヒ・オイレンブルクを全権公使とする遠征艦隊にアメリカ人画家として同行し、万延元(1860)年に三度目となる日本で多くのスケッチを描きました。しかし、ハイネは遠征艦隊が寄港した天津で艦隊と別れ単独行動をとります。彼はシベリア経由でドイツに戻ることを考えていたようですが、これが実現せず横浜へ戻り、この地からアメリカへ帰りました。

帰国時のアメリカは南北戦争の最中で、ハイネも北軍の大尉として戦争に参加しました。彼は北軍が勝利する中で、陸軍の准将にまで昇進しています。そして、この戦争が終わるとアメリカ合衆国の領事としてパリヤリヴァプールに赴任し、かつて中米の国々で活動した外交官に戻りましたが、1871年にドイツ圏の国々が統一されてドイツ帝国が成立すると、この職を離れて生まれ故郷のドレスデンに帰りました。

彼の最後の著作となった *Japan, Beiträge zur Kenntniss des Landes und seiner Bewohner in Wort und Bild*. (Dresden, 1880. 『日本—土地と住民研究』—本学図書館所蔵—) (写真)は、シーボルトのハイネの著作に対する評価である



前述の「荒唐無稽」、即ち「取り留めもなく根拠がない」との説に答えるためにか、書き溜めてきたスケッチを中心に解説を入れる形をとっています。シーボルトは既に亡くなっていましたが、こうすることで彼の画家としての立場を生かしながら、民族学的見地を強化できると考えたのではないのでしょうか。しかし、体調が悪しくなっていたことから、この書物を最後に日本研究の筆を擱き、次の著作が生まれることはありませんでした。

## ■知日家の批判を励みに変えた親日家ハイネ

このように、欧米の国々や日本を舞台に画家、軍人、外交官、さらには文筆家として活躍したハイネは、1885年にドレスデンで数奇な人生を終えました。彼が携わった学芸的な職業の中で、画家としてはペリーの遠征記が好評を博したことにより、大きな成功を収めました。

一方の文筆活動は、偶々この時期最大の「知日家」と目されていたシーボルトと同じ時代に、彼の知識分野と重なる発表をしたことから、痛烈な批判を受けました。しかし、ハイネは次々と新しい著作を刊行するなど、シーボルトの批判を刺激に変えて研究を進展させたと思われる部分も垣間見えます。学者や研究者でもない立場から、独学によって著した書物の中で、6冊までが日本に関係していたことから見ても、ヴィルヘルム・ハイネは大いなる「親日家」だったのではないのでしょうか。

## 基本的な参考文献

中井晶夫訳『ハイネ世界周航日本への旅』雄松堂出版(新異国叢書 第11輯2) 昭和58年。

## 註

- (1) 中井氏は前掲の参考文献で「マスター・メイト」と原文を使い、金井圓氏は『ペリー—日本遠征日記』(雄松堂出版)で「衛兵伍長代理助手」と翻訳している。
- (2) オフィス宮崎翻訳・構成『ペリー—艦隊日本遠征記』第1巻 栄光教育文化研究所、1997年。79頁にはペリーがシーボルトを「人格上の理由で拒絶した」とあり、「提督は…彼(シーボルト)が日本滞在中に法を犯してその生活を奪われ、追放されたことも知っていたのである」と述べると共に、「遠征隊の帰還後に、この遠征に関して事実と異なることを発表した一個人(フォン・シーボルト博士)」とも評している。
- (3) アレクサンダー・シーボルト著 小澤敏夫訳注『シーボルトの最終日本紀行』駿南社、昭和6年。146頁を参照。

おく まさよし(司書・事務長兼管理運営課長)